令和６年６月２１日
丹後農業改良普及センター

梅雨と大雨に備える農作物等の技術対策について

今年は全国的に梅雨入りが遅く、近畿地域では本日６月２１日（金）に梅雨入りが発表されました。これは平年比で１５日、昨年比で２３日遅く、６月に入ってから続いた真夏日が落ち着く一方で、連続した降雨による作物の根いたみや病害発生、低日照による生育停滞等が懸念されます。

また、今年は梅雨に伴った大雨の発生も予想され、例年以上に注意が必要です。

つきましては、次の事項を参考にしていただき、事前及び事後対策の徹底をお願いします。

＜梅雨に対応するための作物別事項＞
※農薬散布は梅雨の合間の曇りの日か晴れた日であって風が弱い日に行うこと。

１　水稲

【事前対策】
（１）排水口及び排水路の整備・清掃を行う。
（２）日照不足・多雨条件下では、いもち病や白葉枯病等が発生しやすくなるため、発生予察情報等を活用し適切な予防的防除を行う。

【事後対策】
（１）冠水した際は速やかな排水に努めるとともに、排水後に清水と入れ替える。
（２）稲の状態を確認し、落水による根への酸素供給等により生育回復を図る。
（３）冠水田では、黄化萎縮病や白葉枯病、アワヨトウ等が異常発生する場合があるため、努めて観察し、防除こよみに準じ適切に防除を行う。

２　豆類（枝豆含む）

【事前対策】
（１）黒大豆等は生育初期に湿害を受けると種子の腐敗や生育不揃い等が生じ、その後の生育に悪影響を生じるため、明きょを設置する等の対策を行う。また、明きょ設置の際は排水溝と溝を接続し、ほ場に水が溜まらないように努める。また、まくら地の溝を一段低くして確実に排水できるよう努める。

（２） ７月中下旬に播種期を迎える小豆では、排水溝の設置や排水口周りの整備等十分な排水対策を行い、適期は種ができるようにほ場の準備に努める。また、溝尻が排水口に接続するように対策を行う。

【事後対策】

（１）ほ場が浸水・冠水した場合は、速やかな排水に努める。

（２）茎疫病や白絹病等の土壌病害の発生が懸念される場合は、各品目の防除指針に準じて株元を重点に散布し、予防に努める。病害株が確認された場合は早急に抜き取り、ほ場外に持ち出して処分する。

３　野菜・花き

【事前対策】

（１）パイプハウス等の施設栽培では、ハウス周囲の排水溝を整備し、ハウス内への雨水の流入を防ぐ。

（２）高湿度が続くと灰色かび病やべと病等がまん延する場合があるため、換気に注意するとともに、梅雨の合間に薬剤散布を行う等予防に努める。

（３）露地栽培では、溝尻や排水溝を整備し、ほ場内に滞水しないようにする。

【事後対策】

（１）パイプハウス等の施設に浸水した場合は、早急に排水に努めるとともに、換気や採光に十分留意し、土壌の乾燥に努める。また、天候の変化に伴い低温・日照不足から高温・多照条件への急激な変化が生じる場合があるため、萎れや徒長が発生しないよう、換気や遮光等に留意する。

（２）畝間及び排水溝に水が溜まっている場合は、速やかな排水に努める。

（３）茎葉に跳ね返り等で泥が付着している場合は、可能であれば水で洗い流す。また、病害の発生が懸念される場合は、各品目の防除指針に準じて殺菌剤の予防防除を行う。

（４）根いたみや茎葉の汚損により草勢の低下が懸念される場合は、少量の追肥や低濃度液肥の葉面散布等を行い、草勢の回復を図る。

（５）果菜類で根いたみ等により草勢が衰えている場合は、摘果や若取りを行い、草勢の回復を図る。

（６）葉菜類においては、天候回復後の強日射によって葉焼け等の発生が懸念されるので、寒冷紗等で遮光する等の対策を講じる。

４　果樹

【事前対策】

（１）排水溝の点検や溝切りを行い、樹園地内に滞水しないように整備を行う。

（２）水田転換園等の排水不良園では明きょなどを設置して排水溝の整備を行う。

（３）長雨が予想されるときには薬剤散布による病気の予防を優先すること（ブドウ：べと病・灰色かび病、ナシ：黒星病、モモ：せん孔細菌病 ほか)。連続的な降雨や強い雨が降った場合薬剤の残効が低下しやすいため、予防剤の散布間隔等に留意する。

【事後対策】

（１） 樹園地内に滞水が見られる場合は、排水溝の再点検を行うとともに、溝切り等の整備やポンプアップ等により速やかに排水して土壌の乾燥に努める。

（２） 浸水被害を受けた樹体では樹体の負担を軽減するため、水没し商品性を見込めない果実を早急に摘果する。樹勢低下の状況を見極めながら、必要に応じて地下部の負担軽減のため、枝のせん定や摘果をする。枝折れ部分は切り戻し、切断面に保護剤を塗布する。

（３） 枝、葉及び果実に付着した泥の洗浄や、病原の温床となり得る折損した枝や被害果の除去に努めるとともに、新たな病害虫の発生抑止に向け追加防除等を実施する。

５　茶

【事前対策】

（１）降雨量が多い場合は土壌浸食の恐れがあるので、排水路や周辺の排水溝の整備・点検を行う。

（２）収穫期間中の場合、摘採前の降雨で生葉が濡れた場合は、可能であればブロワーや生葉コンテナの通風等により製造前に余分な水分を飛ばす。

（３）二番茶芽の生育期は炭そ病に罹病しやすいため、天気予報を注視しながら銅剤等で予防防除を行う。

【事後対策】

（１）畝間及び排水溝に水が溜まっている場合、速やかな排水に努める。

（２）製茶施設等に土砂が流入した場合は速やかに取り除く。

（３）葉が損傷を受けている場合は、殺菌剤を散布し、病原菌の侵入を防止する。先枯れ、枝枯れなど被害が大きな場合は被害直後に整枝・せん枝は行わない。被害が特に大きい場合は秋の摘採を見送り、樹勢回復を待って秋整枝する等、翌一番茶に向けた樹勢回復、葉層確保に努める。

＜大雨に対応するための共通事項＞

（１）大雨が予想される地域においては、ほ場の冠水の恐れがあることから、速やかな排水に備える。特にこれまで冠水したことのあるほ場や地域については、重点的に対応を進めることが望ましい。

（２）病害虫への対策については、ほ場の冠水又は浸水、過湿などにより病害虫の被害を受けやすいことから、病害虫防除所等から発表される発生予察情報に基づき、適期防除に努める。

（３）農業機械が浸水した場合、まずは、JA 農機センター・メーカー・整備業者等に連絡して、点検を依頼する。回路ショートや漏電・火災の懸念があるため、点検前には、絶対にスイッチを入れないこと。

（４）人命第一の観点から、大雨水時においては、農地や農業用施設等の見回りを控え、最新の気象情報を十分に確認し、これらの状況が治まるまで行わない。また、大雨等が治まった後の見回りにおいても、増水した水路その他の危険な場所には近づかず、足下等、ほ場周辺の安全に十分に注意し、転落、滑落事故に遭わないよう慎重に行う。